
崩壊の時間

勝岡正太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崩壊の時間

【Nコード】

N6282Q

【作者名】

勝岡正太郎

【あらすじ】

幻惑されているのは男か、女か。幻惑しているのは、男か、女か。全てが曖昧で、しっくりこない15分間。

「再々度確認しますが、貴方に与えられた時間は十五分です」

格子付きのドアに手をかけると、後ろの中年の警備員が言った。

「大丈夫です。ちゃんと時計を持って入りますし」僕は振り返って微笑む。「それに、十五分を過ぎたら、ベルか何かが鳴るのでしよう？」

「ベルは鳴りませんが、こちらからアナウンスは入れます」

「分かりました」

僕は、錆で汚れたクリーム色のドア……、こちらとあちらを隔てるドアを開く。異世界に踏み込んでいるという実感は、勿論ある。ここに至る通路を歩いているときには、既に額と掌はしつとりと汗ばんでいたし、唇は酷く乾燥していた。

要するに、僕は緊張しているのだ。

「失礼します」僕は小さな声を出しながら、ドアをくぐった。

正方形の部屋の真中には女が一人。どこか陰湿な雰囲気 of 部屋だった。金属製のオフィステーブルと、背もたれのないイスが二つ。天井の四隅には、手にすっぽりと収まりそうな球形の黒い機械がぶら下がっていた。この部屋を監視するためのカメラだ。スピーカーと集音器は、天井の中心に差し込まれていた。一体型ではない。それぞれ一つずつ。それらは昆虫のように、しぶとく天井に貼り付いている。どんな些細な音でも、精密に集音するのだろう。照明は、文字の読み書きに苦勞しない程度に明るかった。

「こんにちは。岸和田先生」

女は座ったままそう言い、切れ長の瞳を僕の方に向けた。彼女が絶立ち上がることは絶対にない。おろか、その場から一センチだつて動くことはないだろう。太ももはイスに革のバンドで縛りつけられ、腕も背中後ろに回され縛られていた。イスは、床に完全に固定されている。彼女が動かすことが出来るのは、おおよそ、唇と瞳

くらいのものだった。

「こんにちは」僕も挨拶をして、彼女の対面のイスに腰を下ろした。背筋を正して彼女を見据える。少し手が震えた。「……、ええ、さて……」

「あら、そんなに緊張しなくても結構ですよ。岸和田先生。私はいつだって、誰に対してもフレンドリーな態度を忘れることはありませんから」

彼女の長い黒髪が揺れた。

彼女はとても美しい顔立ちをしていた。やはり、生で見ると全然違う。その美しさは、写真や噂話などとは比にならない。彼女の、理知的な光を宿す二つの目と、絵画のように白い肌は、僕の心をざわつかせた。

「では、時間がないので、早速質問を始めてもよろしいですか？」僕は空咳混じりに訊いた。

「ええ、いつでもどうぞ。私には、有り余るほどの時間が許されていますから」

どういった意向の発言かは分からない。僕は気にせず、質問を始める。

「貴女は、新宮創子さんですね？」

「……、ねえ、岸和田先生。何も資料を持っていないし、書き留める準備もしてらっしゃらないようですけど……、いいの？」

「それは……、提示された制限です……。メモするのは頭の中です。質問は事前にちゃんと覚えてきています」僕は少々、虚を突かれた。出鼻を挫かれた形になる。「……、あの、そういったご心配はいいので、貴女は、ただ、こちらの質問にお答え下さい」

「それは失礼しました。以後、気を付けましょう。ですけど、ただ、意味や意図の不明な質問があった場合は、理解のために聞き返すことはあるかもしれません」

新宮創子は微笑を湛えて言った。

「分かりましたそれでは、始めます——」僕は頷き、口元を下げた。

「貴女は新宮創子さんですね？」

「はい」

「両親の名前と、現在彼らは存命であるかどうか……、答えられますか？」

「はい」

「では、お答え下さい」

「父親は、新宮友二郎。母親は、新宮香子。旧姓は、須賀谷です。父は十二年前に交通事故で死にました。母は、先月、胃癌で死にました」

「お母様の死去はどうやって知りましたか？」

「係の人が、教えてくれました」

「去年、我が国の首相は何度交代しましたか？」

「……、二度、でしょうか？」彼女は少し不安そうな表情を作った。「正解です」

僕が言うと、彼女は安心したように微かに息を漏らす。

彼女がここへ拘置されて、一年以上経つが逐一外界の情報は正確に伝えられているようだ。最低限の人権は保護されていると言っているだろう。

「貴女は、複数の殺人を犯した結果、今ここに拘置されている訳ですが。何故、罪を犯しましたか？ その動機を教えてください」

新宮創子は目を細め、唇を曲げた。

笑っている。

「動機？ そうね……、ドラマティックなそれは、全く皆無だと思います。私自身が、殺したいと思ったから、殺したのです。……ああ、そうですね。罪、というものの定義に、不信感を抱いていたというのがあります。そう。罪という単語を、法律という単語に置き換えてもそぐいますね」

「分かりました」僕は顎に手をやりながら言う。「では……、それは、一種の快樂殺人だと個人的には思うのですが……。どうでしょうか？」

「はい。そういう認識で構いません」

「結構……」

僕は呼吸と気持ちを整えるために、一度天井を見上げる。

彼女は柔らかな表情を少しも崩していなかった。どこにそんな余裕があるのだろうか。

「貴女は、女性ですか？」

僕はまた質問を始める。

「はい」

「これまで、男性、もしくは同性と、性的交渉を行った経験はありますか？ 答えたくなければ、答えたくない、と仰ってください」

「ありません」

「それは嘘ですか？」

「はい」彼女は上唇を舐めて言う。

「どうして、嘘をつきましたか？」

「気分ですね。特にこれといった意図はありません。……あら、先生は生娘がお嫌い？」

それは挑発的な上目遣いだった。

「ウィンドウレギュレータ、黄金虫、ジル・ド・レの左眼球、フェーザ電流。これらの単語に何か共通するものを感じますか？」

「いいえ、何も。何も思い浮かびません」彼女はゆっくりと首を横に振る。

僕は腕時計に目をやった。もう三分も経っていた。時間の経過が速いように感じる。決して、愉快な時間、という訳ではないが。

「それらの単語にはどういった関連性があるのです？ 先生。私、興味が湧いたわ」

「今まで貴女が犯した殺人の中で、一番印象に残っている殺人を教えてください」僕は彼女の発言を無視し、淡と質問を投げる。

「ノーコメント、で」

彼女は眼を閉じた。フランス人形のように繊細な睫毛が見える。

「では次に、好きな文学作品、特に小説を、三つまで答えてください」

い」

「江戸川乱歩の、鏡地獄。アガサ・クリステイの、そして誰もいなくなつた。夢野久作の、ドグラ・マグラ」彼女は空かさず答える。表情が更に明るくなつた。「私はミステリ小説が好きなの。岸和田先生はどうかしら？」

「貴女は喫煙者ですか？」

「昔は、気が向けば、よく自分で買って吸うことはありました。けれど、ヘビースモーカーという訳ではなかつたわ」

「好んで吸う銘柄はありましたか？」

「特にはありませんわ。岸和田先生は吸われますよね？ 煙草。何を吸いになられるの？」

僕は確かに喫煙者だ。しかし、何故、新宮創子にそれが知れているのかは不明である。僕のことを事前に調べた、とか。けれどその可能性は限りなく無に等しい。彼女の普段の生活には、かなりの制限がかかっているはずだ。

「好んで聴く、音楽のジャンルは？」

「ジャズ。それから、ロックも少し聴きますかね」

これは意外だつた。彼女はいつだってクラシックを聴いていそうなイメージだ。

「貴女が、サカガレイジさんを殺害したとき……、何色の、どんなものが見えましたか？」

「それは、どういう質問？」彼女は顔を微かに傾ける。

「そのままの意味です」

「……、見えたものといえば……ああ、難しい質問だわ……。強いて言うなら……そうですね、赤色の血液が見えました」

「それはどんな味がしました？」

「口に含んではいけないので、分かりません」彼女は不敵に微笑む。

「岸和田先生、一つ、質問があるの。よろしい？」

僕は腕時計を確認する。まだ三分の二以上時間は残っていた。「ええ、何です？」

「今まで数回質問をされましたが、その中に、今ここで、即興で考えた質問は幾つあります？」

「全て事前に考えてきたものですが……。どうして、そう思われたのです？」

「あら、私の勘違いだったのかしら……。いえ……。例えば、面白そうな単語を羅列して、それらの共通点を尋ねてこられたとき……。彼女は思い出を見つめているような、遠い目をして言う。「発言するまでに、時間がややかり過ぎていたように思うの。他の質問より一秒ほどかしら」

「それは、単語を正確に思い出すのに、時間がかかったのでしょうか」「そう。じゃあ、いいわ。質問を続けて下さい」

僕は二、三回空咳をした。ここの空気はやけに乾燥している。いや、外の湿気が多過ぎるのだろうか。

「貴女は最近夢を見ましたか？」

「いいえ」

「今までに見た夢の中で、一番印象に残っているものはありますか？」

「特にありませんね」

「1を3で割ると？」

「0.33333……循環小数となります。精密な答えは出ますが、正確な答えは出ません。永久に」

「では、その0.33333に3をかけると、1と等しくなりますか？」

「なりません」

「十枚のコインを一行に並べ、その表裏で表現出来る状態は全部で何パターン？」

「一〇二四通りですね」答えた後、彼女は少し退屈そうに口を尖らせた。「あの……。もう少し面白い質問はないのかしら……」

「カインを殺したのはアベルですか？」

「多分……。そうじゃないかしら」彼女は口元を微かに下げた。「

私、旧約聖書にはあまり詳しくないの」

「貴女は、また、人を殺しますか？」

「分かりません。殺したいと思うことがあれば、私は何人でも殺すでしょう。岸和田先生だって、その対象として、決して例外ではないのですよ？」彼女は喉の奥から笑い声を出した。

「そうですか」

僕は細く長い息を吐く。

大体、質問すべきことは質問し終えた。けれど決まりの時間まで五分以上残っている。

少し、頭が痛い。新宮創子の独特な雰囲気、僕を酔わせていた。飛行機酔いや船酔いのそれに近い。

やはり、彼女は他とは一味違うようだ。

「先生は、人を殺したいと思ったことはないの？」

今度は僕が彼女から話を聞く番だ。別段それに支障はない。むしろ、多く会話することは、僕の研究にとってのプラスになる。

「僕だって人間ですし、他人を憎むことは少なくともないですが、それが殺意にまで成長することはありません。ありません」

「じゃあ、人に殺されたいと思ったことは？」

「尚更、ありません」僕は吐息を吐く。「第一、そんなことを考えている人間が、この世の中にいるとは思えませんね」

「そうかしら。死刑囚だとかは、そんな風に自分の生を見つめているかもしれないわ」

彼女は、自身のことを言っているのだろうか。僕は生憎、死刑囚という立場に立ったことはないの、その心境は分からない。

「先生は、私のことをどんなふうに見ていますか？ 見えていますか？」

「罪を犯した女性です」

「例えば、どんな罪？」

「は？」

僕は思わず彼女の顔を凝視した。

「私がどんな罪を犯した女に見えますか？」

「殺人です。貴女は、貴女とはなんら無関係の人間を殺しました。それも、複数人」

「それをどこで知りましたか？」

「は？」

僕は彼女から目を離せない。目を逸らすと、魂を吸いこまれてしまふんじゃないか、という可笑しな不安があった。

「……まあ、いいでしょう。では、貴方は、今お幾つ？」

「二十六です。今年の九月で、二十七になります」

「奥さんのことを、どうお思い？」

「どう、とは……？」

「愛おいしい？ それとも、憎らしい？」

「たまに憎らしく思うことはありますが……、それは、ほんのたまにです……。愛しています。とても」

「……そう。では、仮に、私が貴方を誘えば、貴方はその誘いにのりますか？」

「なんの誘いですか？」僕の口調は少し乱暴になっていた。

「それを私に言わせるのね……。まあ、そうね……。ホテルに泊まりましょう、という類の誘いです」

「ツアーの旅行だったら、あるいはのるかもしれません」

落ち着け、僕は自分にそう言い聞かせながら、数度瞬きをする。浅く呼吸をすると、空気が妙に不味かった。

「本当に、貴方は面白い人……」

彼女は口元を上げ、笑窪を作った。

頭が、痛い。耳鳴りも始まった。どうしたのだろう。突然、体調に不具合を感じだす。加えて、一瞬だけだが「ここはどこだったろう」という疑問が生まれてしまった。危ない。ここは面会室だ。監獄の……。そして、目の前にいる女、新宮創子。彼女は殺人鬼だ。いわゆる、サイコ・パス。精神に異常を来している。正常な人格を保てていない。僕は……。僕は、心理学者。F大学で准教授を務め、

同大学で学生相手にセミナーを講じている。今日は、特別なコネを使って、新宮創子という稀有な殺人鬼と面会するために、彼女が拘留されているこの監獄に来た。

大丈夫だ。

大丈夫……。

「どうしたの？ 体調が悪い？」

「いえ……、大丈夫です」僕は瞳を閉じて答えた。

「質問を続けても？」

「ええ……どうぞ、お構いなく……」

「では、続けましょう」彼女は右手で髪を撫でつけながら言う。「
バタフライナイフと、文化包丁。どちらが恋しい？」

「……、文化包丁の方が魅力的です」

「それはどうして？」

「手に馴染みます。学生時代、よく自分で料理を作っていたものですから」

「それで、人を刺したことは？ あるいは、刺したいと思ったことは？」

「ありません」

心臓が、暴れている。暑くなってきた。このままの状態だと、やがて、意識が朦朧としてしまうだろう……。僕は倒れてしまう……。けれど、何故？ 何故、暑いと感じるんだ？ この部屋の空調は格段に悪い訳ではなかったはずだ。最初、暑いと感じることはなかった。快適だとは言えなかったが……。

何故。

いや……。

そうだ。思い出せない。

最初、彼女を見たとき、彼女はどんな格好をしていただろう。それは、すごく肝心な事柄のような気がする。僕は確か、スーツだった。灰色の。シャツは水色。ネクタイは薄ピンクのナロータイを締めていた。そう。それは覚えている。

彼女は今、白衣を纏っていた。タイトな黒のスカートからは、スラリとした脚線美を持った脚が飛び出している。タイツは穿いていない。

「貴方、その囚人服がよくお似合いね。コンピュータゲームのキャラクターみたいだわ……」彼女は気持ちよい笑みを浮かべ言った。「質問を続けますね」

「……、ええ……」

脳裏に、革のバンドでイスに縛られた新宮創子の姿がよぎった。幻だ。

それは、紛れもなく幻。けれど、可笑しい。不思議だ。その幻の方が、妙にしくりくる。現実だったような気がする。

新宮創子は、今、アクリルの壁の向こうにいる。こちらとあちらを、最深部で隔てている壁だ。

ふと、煙草の匂い。

彼女は左手に煙草を挟んでいた。

「いや……、すいません。すこし、頭が痛いかもしれません」僕は額に拳をあてがった。

「じゃあ、これくらいで終わりにしましょうか」彼女は脚を組み代えながら言う。「貴方の、健康が第一ですから」

僕は太い溜息を吐いた。「いえ、まだ大丈夫」後ろを振り返る。左隅のドアの傍に、大柄の男が立っていた。腰には警棒を装備している。それから、少し目線を上げると、球形の監視カメラがフクロウのように僕の方を見つめていた。彼女側のスペースに、それは見当たらない。

「では、次で最後の質問にしましょう」彼女はガラスの灰皿に、煙草の灰を落とした。煙草はかなり短くなっていた。

「はい……」

僕はおもむろに唾液を呑み込む。時刻は分からなくて当然だが、時間の経過が分からない。感覚としては、あれから三分も経っていないように思えた。時間の流れがとても緩慢だ。頭が痛くなる。

「しつこい質問かもしれませんが……どうか、気を悪くしないで」
新宮創子の黒い瞳が冷徹に光った。そして、彼女の赤い唇は艶やかに濡れ、糸を引いていた。とても、魅惑的な表情だった。けれど部屋の照明が少しきつい。少なくとも、僕には明る過ぎた。
僕は、頭の疼きに顔を歪めながら、彼女の質問を待った。
四秒間くらい。

時間が止まるような錯覚。

それから、また、煙草の匂い。

「貴女は、複数の殺人を犯した結果、今ここに拘置されている訳ですが。何故、罪を犯しましたか？ その動機を教えてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6282q/>

崩壊の時間

2011年2月3日23時52分発行